

柿色の紙風船

海野十三

青空文庫

「おや、ここに寝ていた患者さんは？」

と林檎りんごのように血けつしよく色のいい看護婦が叫んだ。彼女の突つ立たっている前には、一つの空ツぽの寝台ベッドがあつた。

「ねえ、あんた。知らない？」

彼女は、手近てぢかに居た青あおン膨ぶくれの看護婦きに訊いた。

「あーら、あたし知らないわよ」

といって編物の手を停めると、グシャグシャにシーツみだの乱みだれて
いるその寝台の上を見た。

「あーら、本当だ。居ないわネ」

「ど、どこへ行つたんでしようネ」

「ご不浄ふじようへ行つたんじゃないこと」

「ああ、ご不浄へネ。そうかしら……でも変ね。この方、ご不浄へ行つちやいけないことになってんのよ」

「まあどうして？」

「どうしてといつてネ、この方、つまり……あれなのよ、痔じが悪いでしょ。それでラジウムで灼やいているんですわ。判るでしよ。つまり肛門こうもんにラジウムを差し込んであるんだから、ご不浄へは行つちやいけないのよ」

「治療中だからなのねエ」

「それもそうだけれどサ、もし用を足している間に、下に落ちてしまうと、あのラジウムは小さいから、どこへ行ったか解らなく

なる虞おそれがあるでしょう」

「そうね。ラジウムで随ずい分ぶん高価たかいでしょ」

「ええ。婦長さんが云つてたわ。あの鉛筆の芯しんほどの太さで僅わずか一センチほどの長さなのが、時価五六万円もするですって。ああ大変、あれが無くなっちゃ大変だわ。あたし、ご不浄へ行つて探してみるわ。だけでもし万一見付からなかったら、あたし、どうしたらいいでしょうネ」

「そんなことよか、早く行つて探していらっしゃいよ」

「そうね。ああ、大変！」

林檎のように顔色の良かった看護婦も、俄にわかに青森産あおもりさんのそれのように蒼味あおみを加えて、アタフタと室外へ出ていった。

だが彼女は、出ていったと思つたら、五分間と経たないうちに、もう引返して来た。引返して来たというより、むしろ飛び込んで来たという方が当つていた。その顔色と云えばまったく血の氣もなく蒼褪^{あおざ}めて――。

「ああーら、どこにもあの人、居ないわ。あたし、どうしましう。ああーッ」

彼女は、藻^も抜^ぬけの殻^{から}の寝台の上に身を投げかけると、あたり憚^{ははか}らずオンオン泣き出した。その奇妙な泣き声に駭^{おどろ}いて、婦長が駆けつけてくる。朋^{ほう}輩^{ばい}が寄ってくる。はては医局^{いきよく}の扉^{ドア}が開いて、医局長以下が、白い手術着をヒラつかせて、

「なんだなんだ」

「どうしたどうした」

と、泣き声のする見^{けんとう}当^くに繰^だり出してきた。

それからの病院内の騒ぎについては、説明するまでもあるまい。なにしろ時価三万五千円のラジウムを肛門^{はき}に挿^{はさ}んだ患者が行方不明になったというのである。患者のことは兎^とに角^{かく}、ラジウムはどうかそこら辺の廊下にでも落ちていまいかというので、用務員は勿論、看護婦までが総出で探しまわった。

「無い……」

「どうも見つからん」

「困ったわねエ。でも探すものが、あまり小さすぎるのだわ」

そのうちに廊下に大きな掲示が貼り出された。「懸賞」と赤イ

ンキで二重丸をうつた見出しで、「ラジウムを発見したる者には、金五百円也を呈^{ていじよう}上するものなり」と、墨^{ぼつこん}痕あざやかに認^{したた}めてあつた。この掲示が出て騒ぎは一段と大きくなつた。

だが結局、判らぬものは遂に判らなかつた。五百円懸賞の偉^{いりよ}く力をもつてしても、ラジウムは出て来なかつた。なにしろ太さといえは鉛筆の芯^{しん}ぐらいで、長さは僅か一センチほどというのであるから、廊下に落ちれば、風に吹きとばされるであらうし、便所の中に落ちてサアと流れ出せば、なおさら判らなくなるだろうし、ことに患者の体内に入つたままとすれば、患者がどこへ行つたかが判らなければ駄目だつた。

病院の一室では、責任者たちの緊急会議が開かれた。結局原因

は、ラジウムを盗むつもりでやって来たのだらうという説が有力だったが、婦長の如きは、患者が識^しらずに三十分以上もあのラジウムを肛門に入れて置くと、ラジウムのために肛門の辺^{へん}がとつかえしのつかぬ程腐^つつて遂^いには一^{いちめい}命^{かかわ}に係^かるだらうなどと心配した。しかし誰が盗んでいったか、そいつばかりは誰にも判らなかつた。

——と云う事件について、今も尚みなさんは多少の記憶を持っていられないだらうか。あの「ラジウム入り患者の失踪事件」というのが、新聞に報道されたのは、もう今から五年あまり昔のことだった。

あの事件に興味を持って、その後の記事を楽しみになすつた方もあつたらうが、そういう方はきつと失望せられたに違いない。

なぜなれば、あれから後、あの患者が逮捕されたという話も無ければ、用務員さんがラジウムを発見して五百円貰ったという記事も出なかったからである。あの事件の報道は、あれっきりのことで、杳^{よう}として後日物語がうち断たれてある有様だった。

五年あまり後の今日――

ここに図^はらずも、あの「ラジウム入り患者の失^{しつ}踪^{そう}事件」の真相と、その後日物語を発表する機会を与えられたことを、みなさんに感謝する次第である。

さてあの時価金三万五千円也のラジウムはどうしたか。それから、あのラジウム入りの患者はどうなったか。

患者の方については、なによりもまず安心せられたい。あの思いやりのある婦長さんや、新聞記者君が心配して下すつたことは、遂に杞憂きゆうに終つたのであるから。つまりあの患者は、ラジウムに生命いのちを取られることなしに、うまく助かつたのである。そして今もピンピンしている。ピンピンしているどころか、こうして原稿用紙に向つてペンを動かしているのである。

あの失踪した患者というのは、実は斯じつくいうそれがしなのである。本名を名乗ってもいい。丸田丸四郎——これが私の本名である。

こう名乗ってしまうと、まず真ま先さきに訊きかれるだろうと思うことは、

「どうしてお前は、病院のベッドから居なくなったのだ」ということだろう。

これについては、正直に次のように答えたい。「そいつは予て^{かね}の順序だったのだ……」

予ての順序だったのだ。つまりラジウムを挿^{そうにゆう}入されて、ほんのすしだけで、じつと寝かされるのを待っていたのだ。医師と看護婦とは、私が寝台^{ベッド}の上に釘づけ^{くぎ}になっっているだろうことを信じて疑わなかった。

「動かないで下さい。ちよつとの間ですから」

と医師は私に云った。そして看護婦の方を向いて、

「いいかね。二十分だよ。……僕は医局にいるからね」

「はア。――」

そして医師が向うへ行つてしまふと間もなく看護婦は私に云つた。

「動かないで下さい。ちよつとの間ですから。――」

そういつて彼女は、林檎のような頬に、千恵蔵氏の^{ちえぞう}ついている

映画雑誌を懐^{なつか}しくてたまらぬという風に押しあて、そして向うへ

パタパタと行つてしまった。多分その千恵蔵氏を残念ながら誰かに返す時間が来ていたのであろう。

そこで私は、たいへん自然に、ベッドから起き上つて脱出する機会を攫^{つか}んだ。近所には別の青^{あお}ン膨^{ふく}れの看護婦が、しきりに編物をしていたが、彼女は編物趣味の時間を楽しんでいるわけであつ

て、管轄^{かんかつ}ちがいのベッドに寝ている私の立居振舞^{たちいふるまい}については、まったく無関心だった。だから私は実に威風堂々^{いふうどう}と、あの部屋を脱出していった。

私は直ぐに便所へ行つた。

鍵をしつかりおろすと、私はかねて勝手を知つたる身体の一部を指先でまさぐつた。はたしてそこには、丈夫な二本の細い紐^{ひも}の垂れ下^{たさが}つているのを探しあてた。

「ううーん」

と私は呼吸^{はか}を図りながら、指先でその紐をギュツギュツと引張つた。果して手応え^{てごた}があつた。やがてズルズルと出て来たのは小銃の弾丸のような細長い容器に入つたラジウムだった。私はそれ

を白紙はくしの上を取つて、ニヤリとほへんだ。

「叩き売つても、まず……三万両は確かだろう」

私は白紙をクルクルと丸めると、着物の袂たもとに無造作に投げこんだ。そして嬉しさにワクワクする胸をおさ圧えて、表玄関ひとこの人込みの中を首尾よく脱出したのだった。

こうして私の永く研究していたスポーツは、筋書どおりにうまく運んだのだった。これで私も、末の見込みのない平事務員の足を洗つて、末は田舎へ引込むなりして悠々ゆうゆう自適じてきの生活ができるというものと、悦よろこびに慄ふるえた。

「ではお前は、あのラジウムを直ぐ処分したのかネ」と訊きかれるであらう。

直ぐ処分するということは、凡そ泥棒およと名のつく人間の誰でもやるであろうところの平々凡々の手だ。そして同時に拙劣せつれつな手でもある。——私はそんな手は採用しなかった。

そこで私の第二段の計画にうつった。それは、大変突飛とつぴな計画だった。私はその足ですぐに日本橋の某百貨店へ行つた。そのの貴金属売場へゆくと、誰にも発見されるような万引をやつた。果して私は逮捕せられてしまった。それでいいのだった。

なぜなれば、即日そくじつから、身体しんたいの自由を失つたと云うことは、即日きふから、私は警察の保護をうけたことになるのだ。

常習じょうしゅう万引まんびんの罪状はきわめて明白めいはくだった。予審よしんが済むと、私の身柄は直ちに近郊の刑務所に移された。やがて判決言渡いっけいわたし

があつた。

「被告ヲ懲役五年二処ス！」
ちようえき しよ

私は晴れて刑務所の人間になつた。私は落ちつくところへ落着いて、たいへん安心したのだった。

その頃、世間では「ラジウム入り患者の失踪事件」のことなんか、もうすっかり忘れてしまつていた。病院の方でも、もう出ないものと諦めていた。あきら警察では、真犯人の私のことを、あろうことかあるまいことか、常習万引罪で刑務所に封鎖してしまつたので、いくら巷を探索したつて、犯人が網に懸る筈がなかつた。あみかくして例の事件は、盲点もうてんに巧みに隠蔽せられることとなつた。いんぺい

それはそれで大変うまくいったのだが、唯一つ困つたことが出

来た。

「なんか異状はないか」

と看守が、私の独房の窓から、室内を覗きこんだ。

「はア、困っていますんで……」

「困っている？ それは何か」

「痔でござんす。痛みますんで、夜もオチオチ睡れません」

「睡れないのは、誰でも入りたてはちと睡れぬものさ。痔だなんて、つまらん芝居をするなよ」

「芝居じゃありませんです。じゃそこで看守さんは見て居て下さい。いま此処で股引ももひきを脱いで、御覧に入れますから」

そういつて私は柿色の股引に手をかけた。

「ば、ば、馬鹿」と看守は慌あわてて呶ど鳴なった。「おれが見ても判らん。上じょうしん申まうしてやるから一両日待つとれッ」

ガチャンと窓に蓋ふたをして、看守は向うへ行つてしまった。

私は顔を顰しかめながら、莫ご塵ざだけが敷いてある寝台の上にゴロリと横になった。

——思いかえしてみると、痔の悪くなるのも無理がなかった。

あの病院へ行つていたころ、本当に悪かったのである。あれからこつち、汗をかくほどの活動を、それからそれへとした上に、ラジウムの隠しどころとして、あの肉ポケットを利用した時間が実に相当の量にのぼったのだった。その結果、患部かんぶは悪化あつかした。いじりまわしたのが悪かったのか、それともラジウムを長い時間、

患部に接して置いたのが悪かったのか。

そういえば、ハッキリ刑務所の人間となるときに、私は千番に一番のかね合あいという冒険をしたのだった。あのとき、私のあらゆる持ちものは没ぼつ収しゅうされ、素すツ裸ばだかにして抛ほうり出されたのだ。それまではラジウムを、あっちのポケットからこっちのポケットへと、頻ひんぱん繁に出し入れしていた。同じところに永く入れて置くと、たとい洋服だの襯衣シャツだのを透とおしてでも、ラジウムの近くにある皮膚にラジウム灼やけを生しょうずるからだ。ところが、この素ツ裸すばだかにされ、そしてやがて襟えりに番号の入った柿色かきいろの制服を与えられる場合になつては、最早もはやラジウムはそのままにして置けなかった。洋服の一部分に入れて置けばよいようなものであるが、五年も同

じところに入れて置くと、洋服の生地がボロボロになり、その隙^す間^{きま}からラジウムは自然に下に転がり落ちるだろうと考えられたからだ。釦^{ボタン}に穴を明けて置いて、その中にラジウムを嵌^はめこむ方法も考えたが、ラジウムの偉^い力^{りよく}は、洋服の生地^{きじ}も馬蹄^{ばてい}で作った釦も、これをボロボロにすることは、まったく同じことだった。――

――結局、柿色の制服を着る際には、どうしてもラジウムを、あの肉ポケットに入れて、うまく独^{どく}房^{ぼう}の中へ持ち込むより外に、いい手はなかった。

こんな風で、私の肉ポケットの疾患^{しつかん}は、更に悪化したのだ。ラジウムも適当なる時間を限って患部に当てれば、吃^{びく}驚^{くり}するほど治癒^{ちゆ}が早い^{ちゆ}が、度を過^こすと飛んだことになるのだった。

「おい一九九四号、出てこい」

「はア。――」

「医務室へ連れてゆくから出て来い」

「はア。――」

私はラジウムを、せいそうようほうき清掃用の箒のモジヤモジヤした中に隠してそれから看守に連れられて外に出た。

（おオ、おオ）

と向いの一二二二号が小窓から顔を出して、私にサインを送った。彼はほんみようこの刑務所へ入って出来た最初の友達であり先輩だった。いがらししようきち本名は五十嵐庄吉ざいじようといい、罪状はすり拘摸だとのことだった。

さて私は、その日から、痔じの治療をうけることになった。何かにつけ、娑婆しゃばとは段違だんちがいに惨めみじな所内しよないではあるが、医務室だけは浮世うきよな並みだった。

「少し痛いが、辛抱しんぼうしろよ」

と医務長は云った。なるほど手術は痛くて、蚕豆そらまめのような泪なみだがポロポロと出た。

独房へ帰つて来ても、痛くて起上れなかった。このままでは、腰が抜けてしまうのではないかと思つた。私はそのとき、箒ほうきの中に隠してあるラジウムを思い出した。私は朝と夜との二回、ラジウムを取り出して患部にあてた。そして毎日それを繰返した。

「どうだ、吃驚びっくりするほど、早くよくなつたじゃないか」

と医務長は得意の鼻をうごめかせて云った。

「へーい」

私は感謝をしてみせたが、^{はら}肚の中ではフンと笑った。医務長の腕がいいのではない。私のやっているラジウム療法がいいのだ。
——こんなわけで、痔の方は間もなく癒^{なお}ってしまった。

それからは、まことに単調な日が続いた。

初めのうちは、刑務所ほど平和な、そして気楽な棲家^{すみか}はないと思^{よろこ}つて悦んでいた。しかし何から何まで単調な所内の生活に、遂^{つい}に愛^{あい}想^{そう}をつかしてしまった。

^{もつと}尤も、私達は手^{つか}を束ねて遊んでいるわけではない。私達の一団は、紙風船^{かみふうせん}を貼^はっているのである。広い土間^{どま}の上に、薄い板が

張つてあつて、その一隅いちぐうに、この風船作業が四組固まつて毎日
のように、風船を貼っているのだつた。それは刑務所の中での一
番華かな手仕事だつた。はなや赤と青と黄、それから紫に桃色に水色に
緑というような強烈な色彩の蠟紙ろうがみが、あたりに散ばっていた。
何のことはない、陽ようしゅん春四月頃の花壇かだんの中に坐つたような光景
だつた。向うの隅で、麻あさの糸つなぎをやっている囚人たちは、絶
えず視線をチラリチラリと紙風船の作業場へ送つて、快こころよい昂奮こうふん
むさぼを貪るのであつた。

風船をつくるには、色とりどりの蠟紙ぜんしの全紙を、まずそれぞれ
の大きさに随したがつて、長い花びらのように切り、それを積み重ねて
おく。それから小さいオブラートのような円形えんけいを切り抜いて積

み重ねる。これは風船の、呼吸^{いき}を吹きこむところと、その反対のお尻のところとの両方に貼る尻あて紙である。呼吸を吹きこむ方には、小さい穴を明けて置く、これだけが風船の材料であるが、それを豊富にとりそろえて置く。

紙風船の作業は、一番初めに、あの花びらのような材料の組み合わせを作る。たとえば赤と黄との二色を、一つ置きに張った風船をつくるのであると、そのような二種の花びらを揃える。それから一枚一枚、すこしずつ外^{はず}して並べ、ゴム糊^{のり}を塗る。それが一役。

次へ廻ると、ゴム糊の乾^{かわ}かぬほどの速度で、その花びらを一つ置きに張ってゆく。すると台のない提^{ちようちん}灯のようなものが出来

る。これが一役で、四五人でやる。

今度はその乾いた分から取って、半分に折り、丁度ちようどお椀わんのような形にする。これも一役。

次は私と五十嵐庄吉とのやっている作業であるが、二人の間に、張はり型がたのフットボールの球に足をつけたようなものが置いてある。まず五十嵐の方が、二つに折られて来た紙風船をとって、いきなりこのフットボールの上にパツと被せる。すると私は、オブラーのりに糊をつけたものを持っていて、その風船の肛門こうもんのようなところへ円い色紙をペタリと貼りつける。すると間髪かんぱつを入れず、五十嵐の方が風船をフットボールから外はずすと、素早くお椀みたいなのを裏返しにして、もう一度フットボールの上に載せる、する

と反対の側の風船の肛門が出てくるから、私は小さい穴のあいて
いる方のオブラートペタリと貼るのである。それで紙風船の作
業は終った。

あとは五十嵐が、出来上った紙風船を、お椀わんを積むように、ド
ンドン積み重ねてゆく。すると、ときどき検査係が廻まわつて来て、
その風船の山を向うへ搬はこんでいつてしまう。

私と五十嵐とは、うまく呼吸いきを合あわせて、

「はッ、——」ポン。

「いやア。——」ポン。

と、まるで鼓つづみを打っているように、紙風船の肛門を貼ってゆく
のであった。——だがこんな仕事は、せいぜい一と月もやれば、

いやになるものだった。

しかし月日の経つのは早いもので、そのうちに刑務所のお正月を、とうとう五度、迎えてしまった。やがて二月が来れば、いよいよ娑婆しやばの人になれることとなった。その後、あのラジウムは遂ついに怪あやしまれることもなく、私の独房ほうきの箒ほうきの中に、五年の歳月を送ったのだった。私に新たな希望の光がだんだんと明るく燃えだした。私は暮夜ぼや、あの鉛筆しんの芯しんほどのラジウムを掌てのひらの上に転がしては、紅い灯のつく裏街の風景などを胸に描いていた。

ところが出獄しゅつごくも、もうあと三週間に迫ったという一月二十五日のこと、私の独房に、思いがけない二人の来訪者があつた。

「オイ、一九九四号、起きてるか。——」

看守の後から背広姿の二人の訪客が入って来た。私は保釈出獄の使者だろうと直感した。

（オヤ）私は心の中で訝いぶかった。二人の客のうちの一人は、見知り越しの医務長だった。もう一人は、日焼けのした背の高いスポーツマンのような男だった。

「この男ですよ。入ったときは、実にひどい痔でしてナ、ところが私の例の治療法で、予期しないほど早く癒なおってしまいました」

「はア、はア」

「どうか何なとお話下さい。あとでこの男の患部を御覧に入れますよう」

「いや、それには及びません。ただ、すこし話をして見たいです」

「それはどうぞ御自由に……」

その見馴れぬ紳士は、私の痔病について、いろいろと質問を發した。私はそれについて淀みなく返事することに勉めた。しかしあの病院のことだけは言わなかった。

紳士は大した質問もせず、医務長と共に引上げていった。

そのあとで私はガツカリして、便器の上に蓋をして作つてある椅子の上に腰を下した。

（どうも変だな）

紳士は一見医師としか見えぬ質問をしていったが、どうも医師くさいところに欠けているような気がした。疵きずを持つ脛すねには、それがピーンと響いたのだった。

(探偵かしら……)

にわかおののの不安に私の胸は戦おののきはじめた。

(これアいかん)

私は真先に、ラジウムの処分問題を考えた。この調子では、私の肉ポケットに入れて出ること、明かに危険であると感じた。

きつと出獄の前に、いまの二人が私の肉ポケットを点検するだろう。そのときこそ百年目に違いない。——私は至急に別なラジウムの隠し場所を考え出さねばならなかった。

「オイ丸田」と作業場で声をかけたのは五十嵐だった。

「昨夜はゆうべ大したお客さまだったナ」

「うん」

「あの若い方を知っているかネ」

「背の高い男のことだろう。——知らない」

「知らない？　はッはッはッ。馬鹿だなアお前は。あれは帆村と
いう探偵だぜ」

「探偵？　やっぱりそうか」

「どうだ思い当ることがあろうがナ」

「うん。——いいや、無い」

「う、嘘をつけ。おれが力になってやる。手前てめえの仕事のうちで、
まだ警察に知れていないのがあるネ」

「いいや、何にも無い！」

私はいつになく、この無二の親友の好意をしりぞけつけたのだった。い

くら五ヶ年の親友だつて、こればかりは打ち明けかねるといふものだ。

それから私たちは、無言の裡に仕事をやった。それは私たちのとつて珍らしいことだつた。二人はこの仕事の間に、たとえば話がないにしろ、軽い憎れ口や懸声などをかけて仕事をするのが例だつたから。

黙だまっているお蔭で、遂に私は素晴すばらしいことを発見した。それはあのラジウムを、安全に獄外へ搬はこびだす工夫だつた。まず大丈夫うまく行くと思われる一つの思い付きだつた。

その日、昼ちゆうじき食が済すんで、囚人たちは一旦各自の監房へ入れられ、暫くの休息を与えられた。やがて鐘の音と共に、またゾロ

ゾロと列を組んで、作業場に入つていった。そのとき私は、あのラジウムを裸のまままで持ち出した。それは柿色の制服の、腰のところにある縫い目に入れて置いた。

作業場へ入ると、私は一同に準備を命じた。私は組長だったから、作業の初めにあたつて、一同の面倒を見てやるため、あつちへいったり、こつちへ来たりすることが許されていた。

「オイ、材料を見せろ」

と私は痩せぎスの青年に云つた。

「へえ、これだけ出来ています」

私はその紙風船の花びらの束を解いて、パラパラと引繰りかえしていたが、

「おい、一枚足りないぞ」

「え？」

「ナニ、いいいいいよ」と私は云いながら、隅ッこに駄目な花びらが乱雑にまるめてあるところへ寄った。そして中から、一枚の柿色の花びらを取った。「こいつを入れとこう」

「それは駄目です」

柿色の花びらというのは、実は不合格にすべきものだった。それは蠟紙ろうがみの黄の上に、間違つて桃色が二重じゅうずり刷ずりになつたものだった。これは二色が重なつて、柿色という思いもかけぬ色紙になつた。元来すこし位、色が変わつても、子供の玩具おもちゃのことだからいいことになっているのだが、柿色という色は囚人の制服と

同じ色であるところから、われわれ囚人の方で厭がつてハネるところにしているのであった、それは看守も大目に見ていたのだった。「なアに、一枚だけだ。これでいいよ。あとは捨てる。この屑くずや山まを直ぐ捨てて来い」

そういうなり私は、柿色の花びらを一枚束の中に加えた。一枚ぐらい余分に加わっても別に作業に不都合はなかった。

それが済むと、私は自分の作業台のところへ帰つて来た。そこには五十嵐が何喰わぬ顔で待っていた。

作業は始まった。

私は柿色の花びらのついた紙風船が、もう来るか来るかと、首を長くして待った。

（あ、来たぞ）柿色の紙風船は、遂に私たちの方に廻つて来た。
五十嵐は無造作に二つに折つて、バサリと球たまの上に被せた。

「やあ」ポーン。

と私は丸い風船の尻あてを貼りつけた。だがそこに千番に一番のかねあい……というほどでもないが、糊のついたところに例の裸のラジウムをくつつけるが早いか、その方を下にしてポーンと柿色の紙風船に貼りつけたのであった、つまり鉛筆の芯しんの折れほどのラジウムは、紙風船の花びらと尻あてとの紙の間に巧みに貼り込まれてしまったのだった。

「いやア。——」ポーン。

五十嵐は同じ調子で、そのラジウム入りの風船をひっくりかえ

した。私はチラリと彼の顔を見たが、彼は口をだらしなく開いて、眼は睡^ねむそうに半^{はん}開^{かい}になっていた。彼は私の大それた計画に爪ほども気がついていないらしかった。私は大安心をして、ポーンと丸い色紙を貼りつけたのだった。五十嵐はその柿色の紙風船に見向きもせず、腕をサツと横に伸ばして今まで出来た紙風船の上に積みかさねた。そこへお詠^{あつら}え向きに検査係が来て、その一と山の紙風船を向うへ持つていった。私はうまくいったと心中躍りあらんばかりに喜び、ホツと溜息をもらした。

こうしてラジウムは、柿色の紙風船の中に入ったまま、私の手を離れていったのだった。

それから後の話は別にするほどのこともない。私は予定より二

週間ばかり早く、刑務所を出された。出るときは、果してあの帆村とかいう探偵立合いの下に、肉ポケットの中を入念に調べられたが、それは彼等を失望させるに役立ったばかりだった。私が出所したあとで、私の囚人服や独房内が、大勢の看守の手で大騒ぎをして取調べられていることだろうと思つて、噴き出したくなつた。

娑婆の風は実にいいものだった。ピューツと空ツ風が吹いて来ると、オーヴァーの襟えりを深々ふかぶかと立てた。

「ああ、寒い」

風が寒いのを感ずるなんて、何という幸福なことだろう。私は五年間に貰いためた労役ろうえきの賃金の入った状袋じようぶくろをしつかりと

握りながら、物珍ものめずらしげに、四辺あたりを見廻したのだった。

そこへ一台の円タクが来た。呼びとめて、車を浅草へ走らせる。円タクに乗るのも、あれ以来だった。私は手を内うちぶところ懐へ入れて、
じょうぶくろ
状袋の中から五十錢玉を裸のまま取り出した。

「旦那、浅草はどこです」

「あ、浅草の、そうだ浅草橋の近所でいいよ」

「浅草橋ならすこし行き過ぎましたよ」

「いや、近くならばどこでもいい。降おろして呉れ」

私は綺麗な舗道ほどうの上に下りた。だが何となく刑務所の仕事場を
思い出させるようなコンクリートの路面だった。私は厭いやな気がし
た。

そこで私は、トコトコ歩き出した。

訪ねる先は、しちけんちよう七軒町の玩具問屋、まるふくしやうてん丸福商店だった。

あっちへ行ったり、こっちへ行ったり、相当まごついたが、やっと思ふ店を探しあてた。店頭には賑かににぎや風や羽根がたこぶら下り、セ
ルロイドのラッパだの、サーベルだの、紙でこしらええた鉄兜てつかぶとだの、
それからそれへと、さまざまなのが所も狭く、天井から下つて
いた。——私は臆面おくめんもなく、店先へ腰を下した。

「いらつしやいまし。何、あげます?」

と小僧さんが尋ねた。たず

「ああ、紙風船が欲しいのですがネ、すこし注文があるので、一
ついろいろ見せて下さい」

「よろしゅうございます。——紙風船といいますが、こんなところで……」

と小僧さんは指さした。なんのことだ、私の坐った膝の前、あの懐しい紙風船が山と積まれているのだ。

（おお。——）

私の胸は早鐘のように鳴りだした。風船を両手でかき集め、しっかりと圧^{おさ}えたい衝動に駆られた。だが私も、刑務所生活をして、いやにキョトキョトして来たものである。

「そうですネ。——」

と私は無理に気を落ち着けて、風船の山を上から下へと調べていった。

（柿色の風船は？）

無い、無い。無いことはないのだが……。およそ私の居た刑務所の紙風船は、一つのこらずこの丸福商店に買われることになっているのだ。それは刑務所で入札にゆうさつの結果、本年も紙風船は丸福に落ちていたのだった。だから柿色の紙風船は、この店にあるより外に、行く先がなかった。売れたのかしら？

「……もう風船はないのですか」

「唯ただいま今、これだけで……」

「そうですか。どこかにしまつてあるんじゃないですか」

「いいえ」

小僧さんは悲しいことを云った。

私はガツカリして、立ち上る元気もなかった。そのとき奥から番頭らしいのが、声をかけた。

「吉松。さつき、あすこれから来たのがあるじゃないか。あれを御覧に入れなさい」

「ああ、そうでしたネ。……少々お待ち下さい。今日入った分がございましたから」

「今日入ったのですか。ああ、そうですか」

私は悦びよろこに飴あめのように崩くずれてくる顔の形を、どうすることも出来なかつた。小僧さんは、大きいハトロン紙しの包みをベリベリと剥むいた。

「これは如何いかさまで……」

「ああ——。」

私は一と目で、柿色の紙風船が重^{かさ}なっているところを見付けた。

「あ、こいつはお誂^{あつち}え向^むきだ。こいつを買^かいましょう。」

私は十円紙幣^{さつほう}を抛^なり出して、沢山の風船を買った。小僧さんが包^{つつ}んでくれる間も、誰^{だれ}かが邪魔^{じゃま}にやって来ないかと、気が氣じやなかった。だがそれは杞憂^{きゆう}にすぎなかった。

私は風船の入った包みをぶら下げて、店を出た。ところが店の前を五六間行くか行かないところで、私はギョツとした。私の顔見知りの男が、向うから歩いて来るのである。それは帆村という探偵に違いなかった。

（これは——）と咄嗟^{とっさ}に私は決心を固めたが、幸いにも帆村探偵

は、並び並んだ玩具問屋おもちゃどんやの看板にばかり気をとられて歩いてゐるらしかった。私はスルリと電柱の蔭に隠れて、とうとうこの間抜け探偵をやりすごした。

私はすぐに円タクを雇うと、両国りょうごくへ走らせた。国技館前で降りて、横丁を入ってゆくと、幸楽館こうらくかんという円宿えんしゆくホテルがあつた。私はその扉ドアを押した。

三階へ上り、部屋からお手伝いさんを追い出すのももどかしかった。宿泊料とチップを受けとつて、ふくら雀すずめのようなお手伝いさんが出てゆくと、私は外套がいとうを脱ぎ、上衣うわぎを脱いだ。そして持つてきた包みをベリベリと剥がした。ナイフなんか使ういとま違がない。すべて爪の先で破った。

出て来た出て来た。

「柿色の紙風船だア！」

外の紙風船は、室内にカーニヴァルの花吹雪はなふぶきのように散った。

「これだ、これだッ」

とうとう探しあてた柿色の紙風船だった。私の眼は感きわまつて、俄かに曇った。その泪なみだを襯衣シヤツの袖で横なぐりにこすりながら、私は紙風船の丸い尻あてのところを指先で探った。

「オヤ？」

どうしたのだろう。尻あてのところに確かに手に触れなければならぬ硬いものが、どうしても触れないのだ。そこはスケートリンクのように平坦だった。

「そんな筈はない！」

咏えきれなくなつた私は、尻あてに指先をかけると、ベリベリと引つpegがした。すつかり裏をかえして調べてみた。ところが、やつぱり何も見当らない。これは尻あてと、呼吸を吹きこむ口紙の方と間違つたかなと思つて、今度はそつちの方をひき^{むし}つてみた。が、やつぱり無い。そんな筈はない。そんな筈はない。が、どうしても見当らないのだつた。

「ああーッ」

私の腰はヘナヘナと床の上に崩れてしまった。夢ならば醒め^さよと思つた。神様、もう冗談はよししようと叫んだ。時間よ、紙風船を破く前に帰れよと喚^{わめ}きたてた。だが、そんなことが何の役

に立つというのだ。絶望、絶望、大絶望だった。数万の毛穴から、身体中のエネルギーが水蒸気のように放散^{ほうさん}してしまった。私は脱ぎ捨てられた着物のようになって、いつまでも床の上に倒^{たお}れていた。

それはどれほど後だったかしらぬ。私はようやく気がついて、床の上に起き直った。

考えてみると、随分馬鹿な話だった。あれはどうまく隠しおおせた三万五千円のラジウムが、とうとう行方不明になってしまったのだ。だが、あの日までは私の手のうちにあつたラジウムである。現在も地球上の、どっかに存在している筈^{はず}であつた。

そう思うと又口惜し^{くや}涙^{なみだ}がポロポロ流れ落ちて来るのだった。人生の名誉を賭けたあのラジウムを、そんなに簡単に失つてなるものかと齒^はぎしり噛んだ。

「一体どこで失つたんだろう？」

私はあの日からのちのことをいろいろと思ひ綴^{つづ}つて見た。いろいろと考えられはしたが、結局しつかりしたことは判らない。しかし一旦糊^{のり}で紙の間に入れたラジウムが、こんな短期に脱け落ちるのはおかしい。といって風船が違つたわけでもない。この柿色の風船のように、半端な色花びらを接^つぎ合^あわせたものは外^{ほか}にない筈だ。

私は同じことを、いくたびも繰り返し繰り返し考え直した。考

え直しているうちに、ふと気がついたことがあった！

「おお、あれかも知れない」

私はムクリと起き上った。

「いや、あれに違いないぞ。うん、そうだ」

私の全身には、俄かに血潮にわの流れが早くなつた。手足がビリビリと慄ふるえてきた。

「よし、畜生……」

私は戸外こがいの暗闇に走り出いてた。

さてそれから後のことを、どう皆さんに伝えたらいいだろうか。私はすこし語りつかれたので、結末を簡単に述べようと思う。そ

の結末というのは、恐らく、もう皆さんの目にハッキリと映っていることと思う。そういつて判らなければ、もつと明瞭めいりように云おう。

皆さんは、二月二十日付の朝刊を見られたであろうと思う。その社会面の中で、なにが皆さんを最も駭おどろかしたであろうか。

それは云うまでもあるまい。

「山麓さんろくの荒小屋あれごやに発見されたる怪屍体」という見出しで、「昨十九日午前八時、×大学生××は××山麓さんろくの荒れ小屋の中に於おいて休息せんとしたところ、図はからずもその中に年齢四十二三歳と推定される男の素裸の怪屍体を発見した。警報をうけて警視庁の大鑑識かんしき課員を伴って現場げんじょうに急行した。江山捜査課長以下は、

現場には同人^{どうにん}のものらしき和服と二重まわしが脱ぎ捨てられてあつたが、その外に何のため使用したか長い麻^{あさなわ}縄^いが遺棄^きされてあつた。其の他に持ちものはない。屍体は即日解剖に附せられたが、この男の死因は主として飢餓^{きが}によるものと判明した。尚^{なお}屍体の特徴として、左肋^{ろつこつ}骨の下に、著^{いちじる}しい潰瘍^{かいよう}の存することを発見した。しかしその成因^{せい}其他^{いん}については未^み詳^{しょう}であるが、とにかく兇行に關係のある重大なる謎として係官の注意を集めている。

後報。——被害者の身許が判明した。彼は五十嵐庄吉（三九）であつた。十日前に××刑務所を出獄した掏摸^{すり}十二犯の悪漢である。彼は刑務所を出で、正門前に待ち合わせていた自動車に乗つたまま行方不明となつたもので、同人の家族から××署へ捜^{そう}索^{さく}

願^{ねがい}が出ていたものである。犯人はいまだ不明であるが、多分同
人^{うち}を恨んでいた者の復^{ふつきゅう}仇らしい見込みである。警視庁では同
人を連れ去った自動車と運転手を極^{きよく}力^{りよく}厳探^{げんたん}中^{ちゆう}である云々」
五十嵐庄吉が惨^{ざん}殺^{さつ}され、しかも左肋骨の下に不可解の潰瘍の
存することについて、皆さんは心当りが無いであろうか。

あいつは掏摸^{すり}の名人だった。私はそれをつい永い間忘れていた。
いや私はもっと忘れていたことがあったのだ。刑務所は学校と同
じことに、立派な人間ばかりいて、立派な友情^{あふ}が溢れるほど存在
しているものだとはかり誤解していたことだ。

私が風船にラジウムを入れたとき、五十嵐の奴はそれを裏返し
たが、そのとき遅^{おそ}く彼^かのとき早^{はや}しで、彼は、小器用^{こきよう}に指先を使っ

て、ラジウムを^す握りとつたに違いなかった。

そのことについて今になって気がついた私は、刑務所の門前で
運転手に化けると、刑務所の門前で出獄したばかりの彼をうまう
まと^{ゆうかい}誘拐したのだった。そしてあの荒れ小屋に連れこむと、身
の自由を奪っていろいろと^{せつかん}折檻したが、^{こうじよう}強情な彼奴は、ど
うしても白状しなかった。私は怒りのあまり、遂に最後の手段を
^{えら}択んだ。彼の身体をグルグルと^{あさなわ}麻縄で縛りあげると、ゴロリと
床の上に転がした。そのまま幾日も^{ほう}抛つて置いた。無論一滴の水
も与えはしなかった。だから彼は^{つい}遂に^{きが}飢餓と寒さのために死んで
しまったのだった。

私は彼の身体の冷くなるのを待つて縄を解いた。そして素裸に

すると全身を改めた。あらたそのときあの左肋骨下の潰瘍ろつこつ かいようを発見したのだった。

「そうら見ろ。貴様がラジウムの在所ありかを喋しゃべらずとも、貴様の身体がハッキリ喋っているではないか。ざまア見やがれ」

私は早速彼の左のポケットの底を探つて、とうとう目的のラジウムを引張り出したのだった。無論彼が白状せずともこのラジウムの力で、彼の身体の上に遠からずして潰瘍かいようが現われるだろうことを私は初手しよてから勘定に入れていたのだった。

だが私も詰つまらんことから人殺しをしてしまった。今は後悔している。あのラジウムは、未だにそのまま持っている。それを金に換かえるためと、そして私の新しい世界を求めるため、今夜私は日

本を去ろうとしている。多分永遠に日本には帰って来ないだろう。私はあれを金に換えた上で、赤い太陽の下に、花畑でも作って、あとの半生をノンビリと暮らすつもりである。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第2巻 俘囚」三二書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1934（昭和9）年2月号

入力：tatsuki

校正：花田泰治郎

2005年5月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.AOZORA.GR.JP/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

柿色の紙風船

海野十三

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>